

第8章 活用

【活用のための基本方針】

様々な事業の実施を通して、本史跡の本質的価値が後世へ引き継がれる環境づくりを推進する。また、各団体からの協力を得ながら、ウポポイの関連施設としての役割や、多文化共生社会の実現に向けた拠点的作用を果たせるよう努める。

第1節 活用の方向性

本史跡は幕末北辺防備の遺跡として、全国的に見ても重要な歴史的価値を有している。

また、アイヌ民族と和人の関係史が注目され、同時代の北海道への関心が高まっている現在、本史跡が担う社会的役割は極めて大きく、白老町の関連計画においては「歴史・文化の拠点」として、ウポポイとの関係性においては「関連区域」として位置付けられている（図14「ウポポイの関連区域」参照）。

このため、本質的価値の確実な保存を前提に、本史跡の歴史的経緯や良好な保存状態にある遺構、仙台藩士の蝦夷地防備を助けた天然の地形を構成する各要素の理解促進、さらには白老町の豊富な文化財や、藩士たちが築こうとしたアイヌ民族との共生関係の逸話など、積極的な啓発や発信の重要度が増している。

以上のような状況を踏まえ、本史跡の活用を推進するための方向性を示す。

- (1) ガイダンス施設である元陣屋資料館を中心に調査研究を行い、絶えず情報発信を行うとともに来訪者の多様化やニーズの変化に応えられるよう、本史跡の本質的価値や歴史的意義の普及や発信に必要な機能を充実させる。
- (2) 本史跡の本質的価値を主題に、体験や体感を伴った講座や散策会を定期的実施する。
- (3) 教育現場や各文化団体、観光協会や地域住民との情報交換を経ながら、本史跡の恵まれたフィールドを最大限に活かせるイベントやレクリエーションを計画する。
- (4) 本史跡を含めた郷土の文化財に関する学びや発信を通して、多文化共生社会の実現に資する拠点的作用の構築を目指す。

第2節 活用の方法

1 本質的価値を活かした取組の方法

本史跡の本質的価値の理解促進や関心の深化には、土塁や堀割など良好な保存状態にある遺構、天然の地形を巧みに利用した立地環境を効果的に活用していくことが重要である。参加者が本史跡の本質的価値や、文化財保護の理念や意義に触れられる機会を創出若しくは拡充するために有効な、今後の活用事業の核になると考えられる取組を示す。

(1) 幕末北辺防備の遺跡

藩士植樹の赤松や神社及び拝領記念石灯籠など、仙台藩士の蝦夷地防備に懸ける思いを残す要素については、地域学講座の受講生や仙台藩白老元陣屋資料館友の会などと連携し、町民目線も加えた魅力や見所の発信方法を構築していく。

また、造営の技術や材料などの運搬方法、アイヌ民族との関わりや日常の暮らし及び訓練の様態などの情報も調査を重ね、発信につなげていくことが重要である。

(2) よく残る遺構

土塁や堀割及び建物跡などの実態解明に向けた発掘調査は、事業の様子を公開するとともに参加を呼び掛ける。また、復元や展示のための整備も公開に努めるとともに、参加者目線のレポートを寄せていただくなど、見学や参加する楽しみや意義の醸成も検討していく。

なお、本史跡は建物の復元に至っておらず、陣屋跡としての雰囲気や伝わり難い状況にあることも大きな課題であることから、AR（オーグメンテッド・リアリティ）やVR（バーチャル・リアリティ）の導入などによる情報の補完を検討していく必要がある。

(3) 白老元陣屋を定める理由となった自然の要害

フシコウトカンベツに生息する生き物の観察会や、東西舌状台地の自然観察などを核とした季節ごとのレクリエーションを実施し、天然の地形を利用して造営された本史跡の特色に触れられる機会を増やしていく。

また、仙台藩士による用地は範囲が判明していない秣場地所を含めると極めて広大である。文献調査などから全体像を解明し、一体的な活用につなげられるように努める必要がある。

2 その他の取組の方法

本史跡への理解や関心を促すためには、本史跡を訪れる機会の創出や増加が大きな意味を持っている。また、来訪者へ本史跡の魅力を余す所なく伝えるためにも、的確なガイダンス機能が不可欠となる。さらに、教育現場での普及や啓発に結びつくように、可搬的で可視的な素材の開発も重要となる。

こうした観点に基づき、本質的価値の活用を補完及び後押しする方法について、「普及活動」、「解説活動」、「教育活動」、「情報発信」に整理して述べる。

(1) 普及活動

- ①陣屋跡積極活用プログラム「陣屋の日」など、本史跡をフィールドにしたレクリエーションは、多様なイベントを楽しめる企画であることを意識すると同時に、仙台藩の陣屋跡としての雰囲気を重視することで、関心の高まりを促していく。
- ②旅の風習や決まり事など、北辺防備の出兵に関わる事柄や、近世期の人々の日常を学ぶ勉強会や体験会などを計画していく。
- ③各種展示会については、陣屋跡を管理する道内各自治体や、北辺防備に関わりの深い東北地方の自治体などから資料の貸借を通して、相互の発信力を高められるように企画する。また、郷土史を主題とした展示会や、子供を対象とした展示会も従来同様に実施していく。
- ④本史跡の特徴や魅力を被写体とした撮影会を主催・共催し、作品を元陣屋資料館や観光施設などで掲示して、来訪者の目を引く仕掛けをしていく。
- ⑤「館長とまち歩き講座」は郷土学習の事業として継続し、各地域の町内会などのコミュニティには、「地域の語り部」のような役割から郷土史の発信を担えるように支援していく。



陣屋の日



館長とまち歩き講座

(2) 解説活動

- ①質の高いガイド体制の構築を目指して、仙台藩白老元陣屋資料館友の会へ定期的に研修や学習の機会を提供する。また、新たな人材が加入しやすい環境を醸成していく。
- ②解説時に示せるように、本史跡の立地環境を視覚的に実感できる3D映像やドローンによる航空写真を撮影するとともに、提示用携帯端末の導入を推進する。
- ③初歩的な手話の習得や点字によるコミュニケーションツールの作成など、多様な来訪者を応接するための環境を整える。
- ④多言語音声ガイダンスシステムは、段階的にガイドポイントの拡充を図る。
- ⑤展示資料の注目ポイントや豆知識などを記載した資料を窓口配布のリーフレットに折り込む。また、対象資料は定期的に更新していく。
- ⑥白老元陣屋造営時の様子や修羅前の様子を視覚的にイメージできるように、VRなどの映像媒体の導入を検討していく。



仙台藩白老元陣屋資料館友の会による解説



多言語音声ガイダンスシステム

(3) 教育活動

- ①町内小中学校における郷土学習の機会を増やし、質の高い学習を提供できるよう、教育現場と協議しながらカリキュラム作りを進める。
- ②藩士たちの携帯品や当時の生活用具などの複製化を進め、出前講座や貸出用のツールである「博物館キット」を開発する。
- ③地域学講座は郷土への誇りや愛着が芽生える機会となるように、学習内容の検証と改善を重ねながら継続していく。また、学校と地域の橋渡し役を担い、白老町の将来を担う人材育成の協力を仰いでいく。



地域学講座

(4) 情報発信

- ①本史跡に関するパンフレットを始めとした発行物は、町内の公共施設や観光協会及び駅舎などで、常に手に取れる状態にあるように、配布を徹底する。
- ②「仙台陣屋かわら版」は、本史跡で行われるイベントや元陣屋資料館が主催する事業を告知する媒体である。今後もレイアウトなどの工夫により読者層の拡充を図りながら発行していく。
- ③年報に該当する『仙台藩白老元陣屋資料館報』は、講演会や展示会実施の報告も兼ねた構成となっている。論考やエッセイを加えるなど多様な需要や訴求力につながるように、掲載内容のバリエーションを考慮しながら定期発行を継続する。
- ④『ふるさと再発見シリーズ』は創刊から5巻まで発行を重ね、郷土史の導入書として浸透しつつある。今後も継続するとともに、海外からの来訪者へも発信できるように多言語版の導入も

検討していく。

- ⑤『資料館解説書』や『文化財ガイドマップ』は情報の更新を進める。『資料館解説書』は本計画の内容を反映させ、施設名や用語の修正を行う。また、『文化財ガイドマップ』は近年搭載の周知の埋蔵文化財包蔵地を追加し、先史時代の時代区分を反映させる。
- ⑥「仙台陣屋かわら版」や『仙台藩白老元陣屋資料館報』、『ふるさと再発見シリーズ』などの発行物を、ホームページ上で公開していく。
- ⑦ホームページだけでなく、白老町共有のフェイスブックなどの SNS も有効に活用し、主催事業の実施予定などを随時発信していく。

3 事業連携

各団体との連携は計画段階から意思疎通を図り、本計画の内容を踏まえて、本史跡の本質的価値の保存などに悪影響が及ばないように留意する。

以上を前提とし、活用の促進を図る連携の在り方を以下に示す。

(1) 本史跡の活用に関する連携

- ①良質で正確なガイダンスを提供できるように、仙台藩白老元陣屋資料館友の会とは定期的に情報や意見を交換していく。
- ②枝拾いや落葉集めなどの実施を事前に告知し、日常的な保存管理事業に対する町民の参画を募ることで、地域や町民が一丸となった文化財保護の体制を構築していく。

(2) 郷土史発信のための連携

- ①観光や都市計画の所管課と事業計画を共有し、本史跡以外のフィールドでも元陣屋資料館の職員が白老町の郷土史の発信を推進できるように連携する。
- ②各地域の文化伝承や文化遺産などに関する情報収集を協働で行い、成果を現地公民館での展示などにより発表することで、郷土史への関心を高めていく。

(3) 幕末史や陣屋史の認知向上のための連携

仙台藩白老元陣屋資料館友の会とともに、陣屋史や幕末史を発信する施設の関係団体と交流を重ね、事業の仕掛けや工夫に関する情報を交換するとともに、研鑽し合う機会の創出を図る。

(4) 多文化共生社会の実現に向けた連携

上述の取組を積み重ねながら協力者を集め、望ましい連携の在り方や効果的な手法を考案していく。また、本計画の進展のためには、交流促進バスの有効利用や、白老町内で活動する他のガイド団体との連携が重要である。所管課や関係団体との協力体制を築き、本史跡を含めた文化的・歴史的財産の総合的な活用を目指していく。